

された記録が残っており、その時に多くの埋葬施設が出土したといわれる。その後、大正期には参道付近から数基の石棺が確認されたという。また、この丘陵地の北側に位置する水田からも石棺の出土が確認されたといわれる。これらの埋葬施設を総合すると、金比羅神社を中心とする範囲は墓域として場の利用があったと推定され、弥生時代の集落の存在もうかがい知ることができる。

1979（昭和54）年には圃場整備事業に伴う発掘調査を南有馬町教育委員会が主体となり、古田正隆が調査を担当した。結果、弥生時代の甕棺や土坑墓をはじめ古墳時代や古代の遺物も確認された。甕棺は合口のタイプが出土している。同時代の遺跡として今福遺跡があげられ、当遺跡との関連性が指摘される。

【参考文献】

古田正隆 1981『北岡金比羅祀遺跡調査報告－圃場整備に伴った調査－』南有馬町文化財調査報告第1集 南有馬町教育委員会



第2図 北岡金比羅祀遺跡および周辺遺跡地図 (S=1/25000)

第Ⅱ章 試掘調査

島原鉄道の島原外港駅（現、島原港駅）－加津佐駅間が2008（平成20）年4月1日に廃止された。その後、跡地活用の検討が行われた結果、市道南島原自転車道線が計画、実施されることとなった。

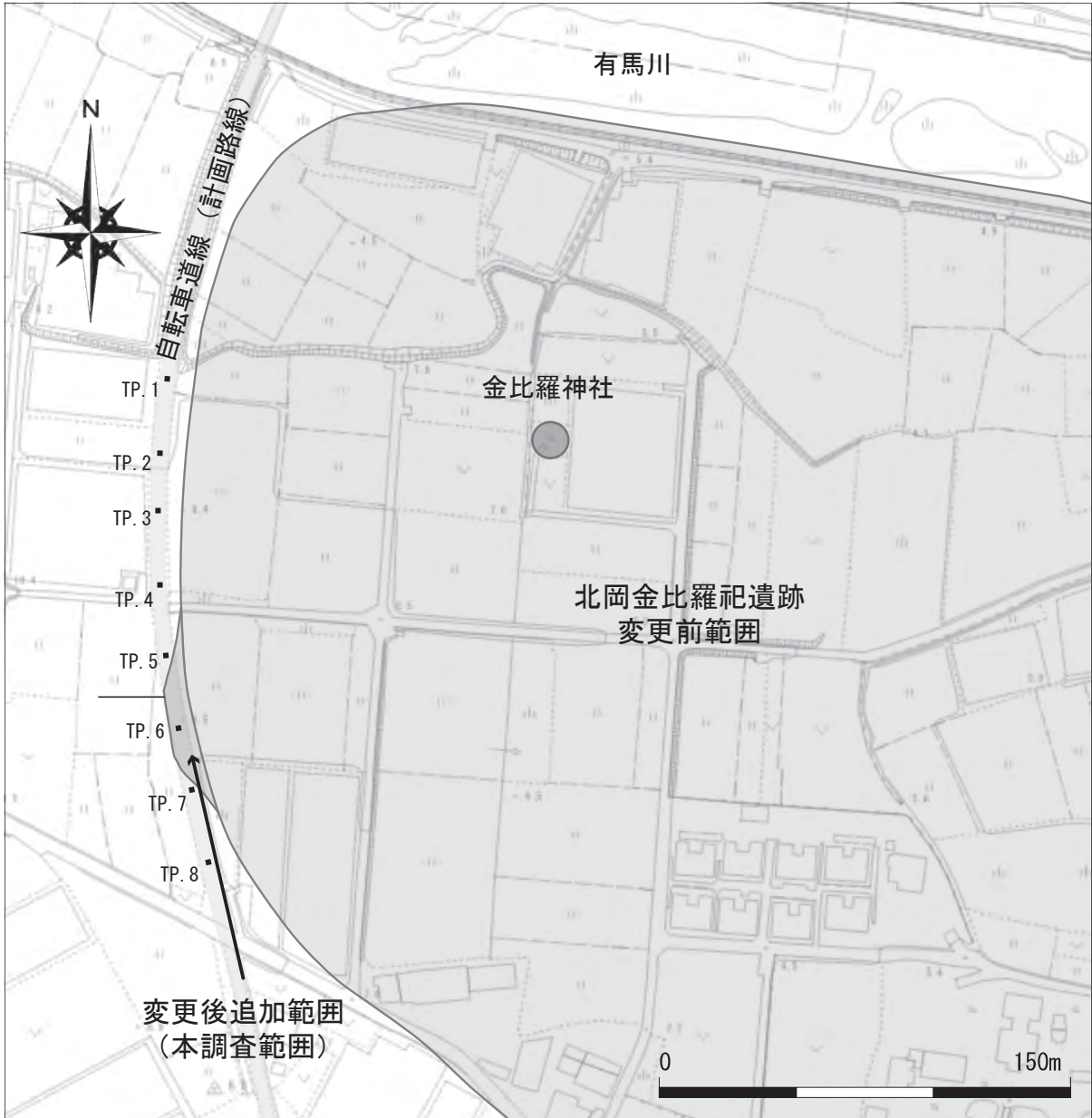
この計画に伴い、南島原市教育委員会文化財課によって試掘および範囲確認調査が実施されることとなった。計画路線上に存在する遺跡および隣接地の調査を行った結果、二本櫓遺跡（深江町）・大崎鼻遺跡（布津町）・町村遺跡（有家町）・北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）が本調査の対象となった。北岡金比羅祀遺跡の調査は遺跡の範囲外であったが、計画路線が遺跡範囲に隣接していたため、令和4年1月26日から令和4年2月26日まで試掘調査を行った。

2m×2mの試掘坑を8箇所を設定して調査を開始した。鉄道のバラスト敷設のため、重機によってバラストと表土層の掘削を行い、以降は人力掘削による層位ごとの遺構と遺物確認を実施した。調査中に遺構・遺物が出土した場合は、その状況に応じて写真を撮影した。各調査坑は完掘した段階で土層実測図の作成と写真撮影を行い、調査終了後は重機による埋め戻しを実施した。

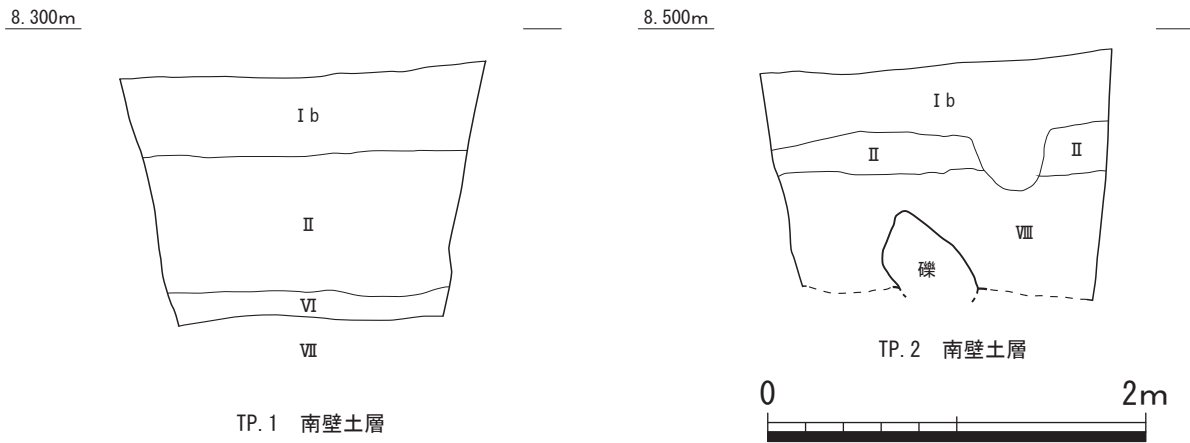
今回の試掘調査における基本土層は以下のとおりである。

- I a 層 旧島原鉄道線路の道床バラスト。砕石、炭化物及び鉄分の影響を受けた土で構成される。
- I b 層 旧島原鉄道線路の道床となるバラスト。
- II 層 オリーブ色土。近代以降の造成土。鉄分の影響を受け、褐色土に変色している場合がある。
- III 層 オリーブ灰色土。砂質を帯びる。近世以降の陶磁器片や貝殻が出土する。鉄分の影響を受け、褐色土に変色している場合がある。
- IV 層 オリーブ灰色土。III層より強い砂質を帯び、僅かに暗い色調。鉄分の影響を受け、褐色土に変色している場合がある。中世の遺物包含層か。
- V 層 オリーブ灰色粘土。鉄分の斑紋を5%程度含む。
- VI 層 暗褐色粘土。しまりが弱い。
- VII 層 オリーブ灰色粘土。数mm～人頭大の礫をまばらに含む。
- VIII 層 礫層。数mm～1m程度の亜角礫で構成される。鉄分の影響を強く受け褐色となり、本来の色は失われている。

調査の結果、TP.6から礫の集中地点が検出され、礫の隙間に完形の土師皿の出土が認められた。この結果に基づき、TP.6を中心とした区域を既存の遺跡範囲へ追加する手続きを行った上で、事業主体の南島原市建設部建設課自転車道路整備班との協議を重ねた。その結果、TP.6を中心とした約135㎡の範囲が本調査の対象域となった。

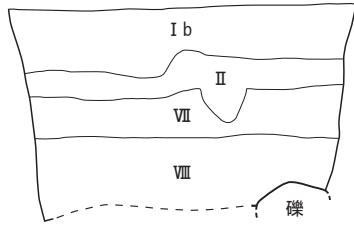


第3図 北岡金比羅祀遺跡範囲（変更前・変更後）および試掘坑配置図（S=1/2500）



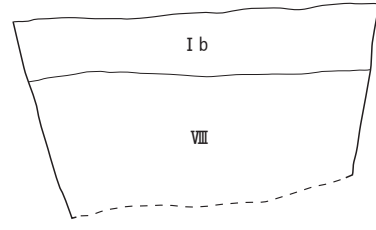
第4図 TP.1・2南壁土層断面図（S=1/40）

8.600m



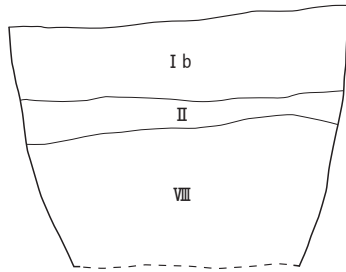
TP.3 南壁土層

8.800m



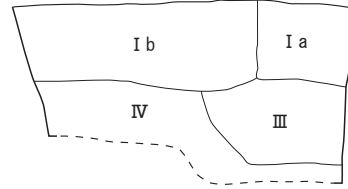
TP.4 南壁土層

8.900m



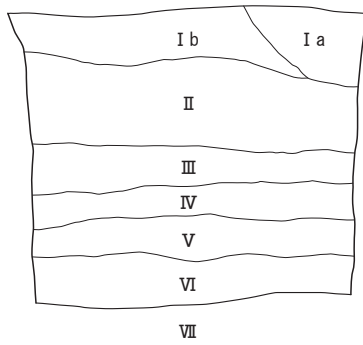
TP.5 南壁土層

8.800m



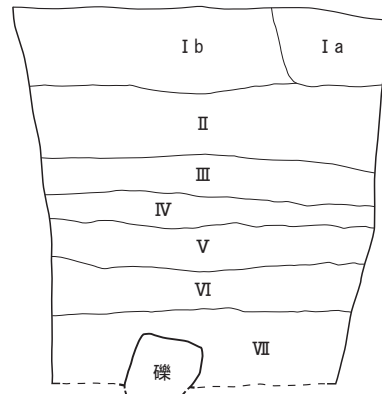
TP.6 南壁土層

8.800m



TP.7 南壁土層

8.700m



TP.8 南壁土層



第5図 TP.3~8南壁土層断面図 (S=1/40)

第Ⅲ章 本調査

第1節 調査の概要

本調査は令和5年1月4日から令和5年1月20日まで実施した。鉄道のバラストとその直下の表土を掘削する目的で重機による表土掘削を行い、その後、遺構および遺物の位置把握のためのグリッド設定を開始した。座標によるグリッド設定に関しては、調査幅が狭かったため任意のグリッド設定した。有馬川方向から順次グリッド番号を設定して、これに基づいて遺構および遺物の取り上げを行った。また、必要に応じて遺構および遺物の記録も同時並行で試掘調査を実施した。

試掘調査の結果を受けて、遺構検出はⅢ・Ⅳ層を中心に観察を試みた。ただ、地点によって層位の違いがみられることが予測されたため、Ⅲ・Ⅳ層を前後する層位も遺構検出の対象としながら調査を実施した。全体の遺構検出に先駆けて、先行トレンチをTP.6の周辺域に設定して下層確認調査を行った。結果、それぞれのトレンチで堆積の違いがみられたため、TP.6の堆積と比較検討しながら調査を進めていった。

第2節 基本土層

本調査では調査区東西の土層を中心に観察を行った。その結果、試掘で報告された礫の集中域を境に堆積が異なることがわかった。

1層 礫（島原鉄道跡のバラスト）

島原鉄道レール建設時における敷設バラスト。試掘調査のⅠa層とⅠb層に該当する。

2層 黄褐色粘質土（Hue2.5Y5/4）

近代以降の造成土。水田の作土層。試掘調査のⅡ層に該当する。

3層 黄褐色砂質土（Hue2.5Y5/3）

近・現代の遺物包含層と考える。土のしまり粘性ともに弱い。近世の染付片と近代の磁器が確認される。マンガンの影響で赤くなった土が混入する。試掘調査のⅢ層に該当する。

4層 暗灰黄褐色砂質土（Hue2.5Y5/2）

3層に比べて土のしまりと粘性は弱い。砂のみの堆積である。無遺物層。

波が穏やかなときに堆積した層と考えられる。試掘調査のⅢ層に該当する。

5層 暗青灰色砂質土（Hue10BG4/1）および黄灰色砂質土（Hue2.5Y6/1）

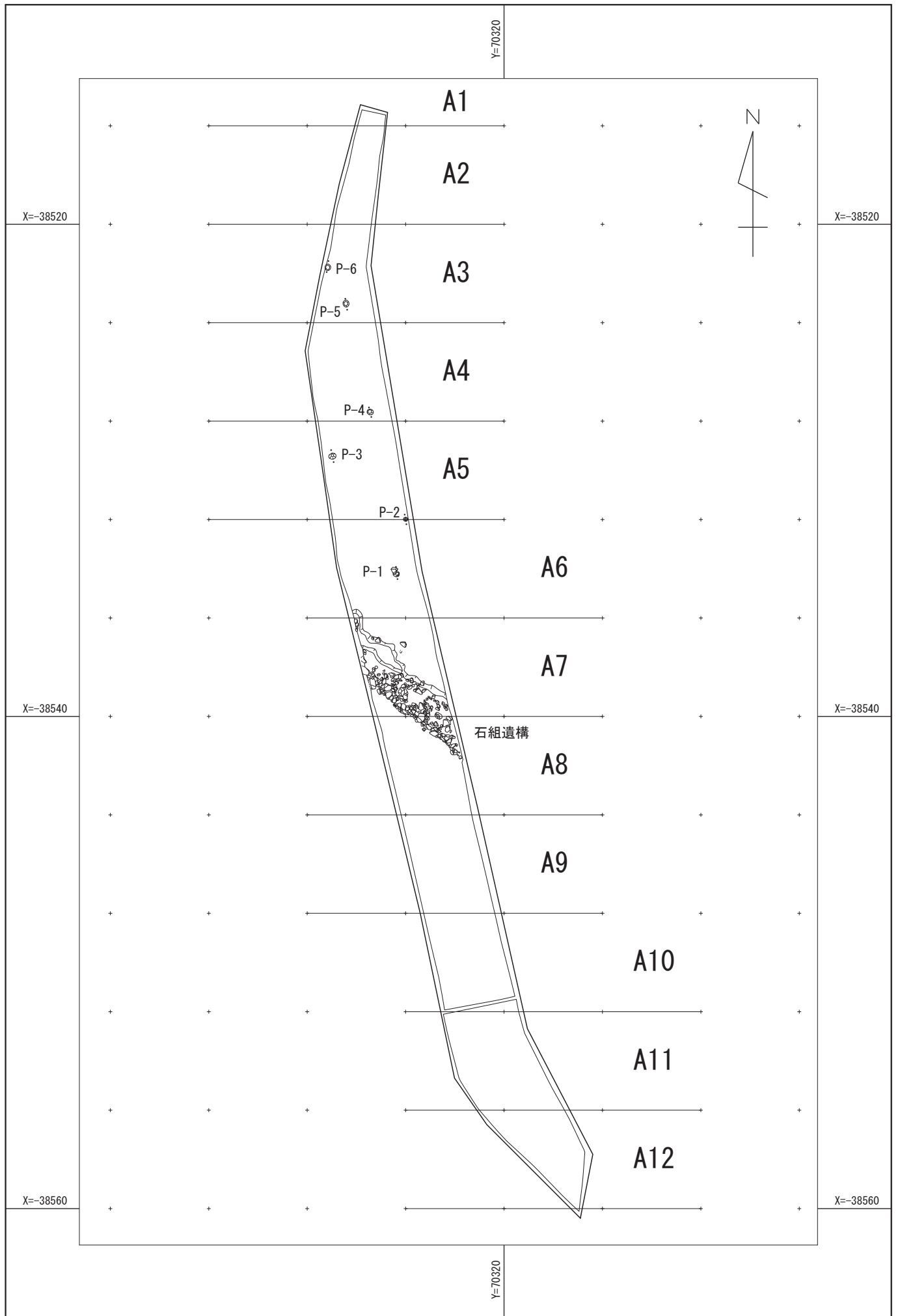
近世の遺物包含層と考える。砂質で構成され、全体的に貝の混入が目立つ。波が穏やかな段階に堆積した層と考えられる。無遺物層である。試掘調査のⅢ層に該当する。

6層 黄灰色粘質土（Hue2.5Y6/1）

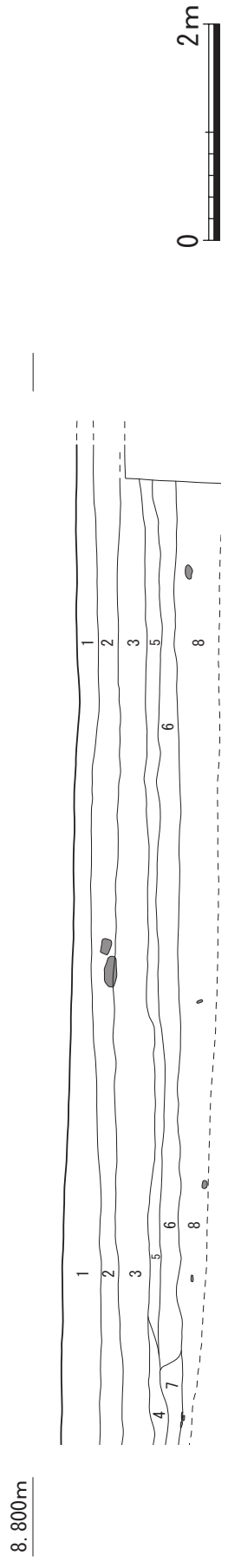
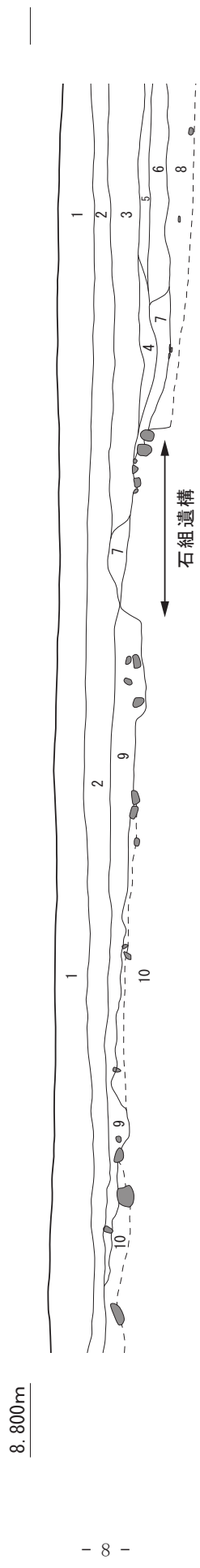
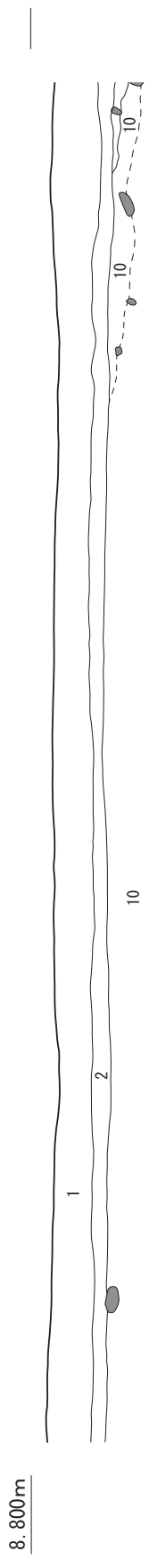
近世の遺物包含層と考える。土のしまりは良く粘性も強い。遺物は近世の陶磁器が確認された。8層以降に埋め立てられたものとする。18世紀前半もしくは中頃にかけて埋め立てられた新田開発の痕跡の可能性が高い。試掘調査のⅤ層に該当する。

7層 暗青灰色粘質土（Hue10BG4/1）

中世の遺物包含層と考える。土のしまりは良く粘性は強い。グライ化した層である。遺物は中世の石鍋片や陶磁器、近世陶磁器が確認されている。石組建設以降に堆積したものとする。試掘調査の



第 6 図 調査区設定図 (S = 1/200)



第7図 調査区東壁土層断面図 (S=1/60)

IV層に該当する。

8層 褐灰色粘質土 (Hue10YR5/1)

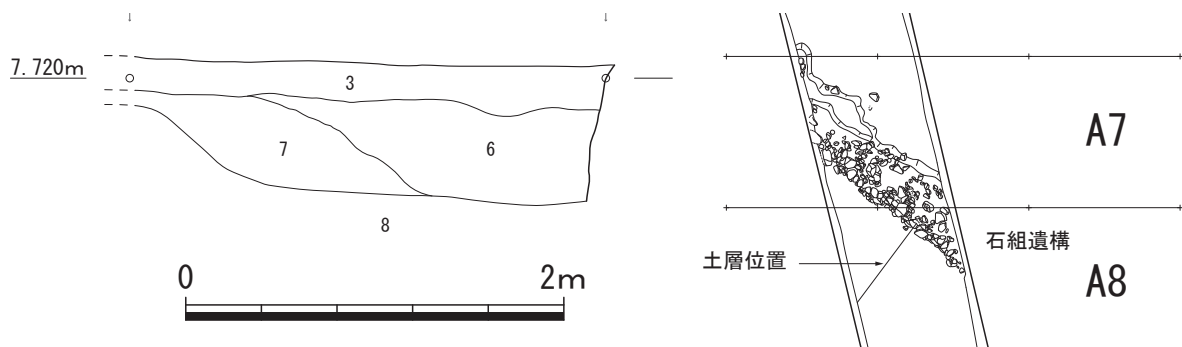
中世の遺物包含層と考える。完全な粘土層である。遺物は礫層との境から中世の土師皿片が確認される。この層は埋め土ではなく自然堆積層と考えられ、流れ込んだ中世の遺物がパックされた可能性が高い。下位は色調が濃くなるが、これは有機物の腐食によるものと思われる。試掘調査のVI層に該当する。

9層 暗褐色粘質土 (Hue10YR3/3)

中世の遺物包含層と考える。遺物包含層。土のしまりはよく粘性も強い。直径は1cm以下の炭化物が確認される。遺物はローリングを受けて磨滅が目立つが、青磁片・土師器片が出土している。また、石鍋片も確認された。整地面を形成するために埋められた土砂と考えられる。ピット内の覆土もこの土と同じである。

10層 橙色礫 (Hue7.5Y6/6) および褐灰色礫層 (Hue10YR5/1)

試掘調査のVIII層に該当する。



第8図 石組遺構外南壁土層断面図 (S = 1/40)

第3節 遺構

遺構は礫の集中域の北側において6基のピットが確認された。また、礫の集中域も全体の検出を進めていくうちに石組遺構と判明した。10層をベースにピットが形成されており、数なくともピット群は当時から陸地であったことがいえる。石組遺構は保存状態は良好ではなく壊された状態で確認された。残存している石組を観察すると、面を揃えた状態で石積を行ったことがわかった。

P-1 A6区内で検出。長軸が25cm・短軸20cmの平面形である。深度は20cm。覆土は9層と同じである。土師皿片が出土。底に近い位置から出土しているため、廃棄された段階で埋められた可能性が高い。

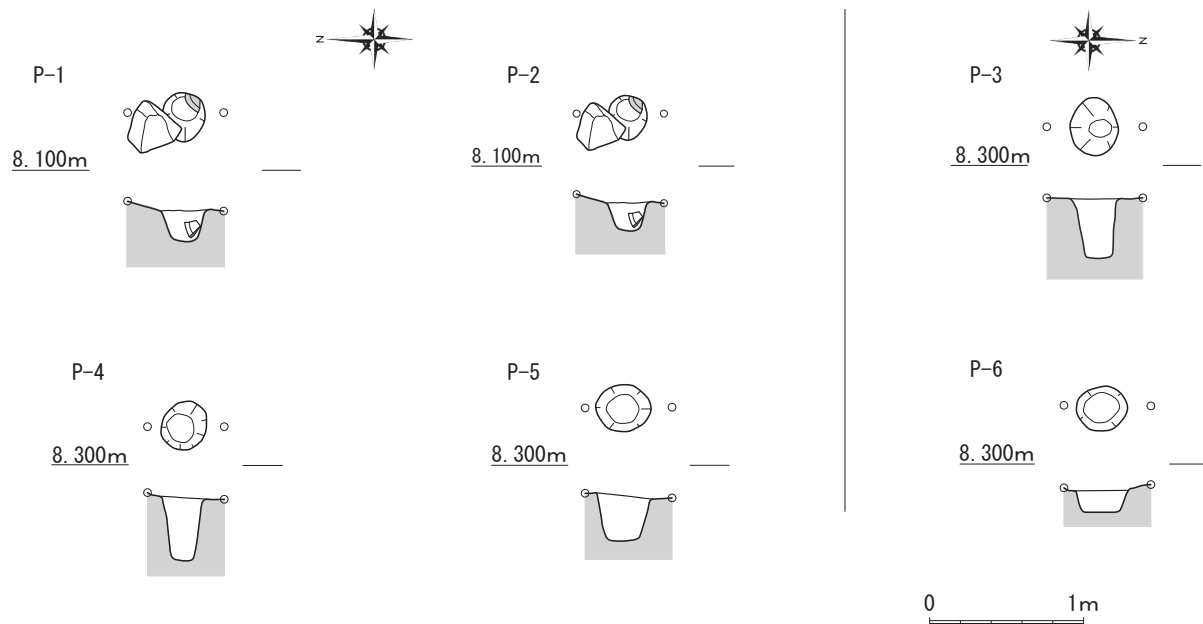
P-2 A5区とA6区の境から検出された。長軸が20cm・短軸20cmの平面形で深度は10cm前後を図る。覆土は9層で構成される。遺物は確認されなかった。

P-3 A5区から検出された。長軸が25cm・短軸20cmの平面形で深度は30cm前後を図る。覆土は9層の堆積土と同じである。遺物は確認されなかった。

P-4 A4区から検出された。長軸が25cm・短軸20cmの平面形で深度は40cm前後を図る。9層の堆積土で構成される。深いピットであったため遺物の存在が期待したが確認はできなかった。

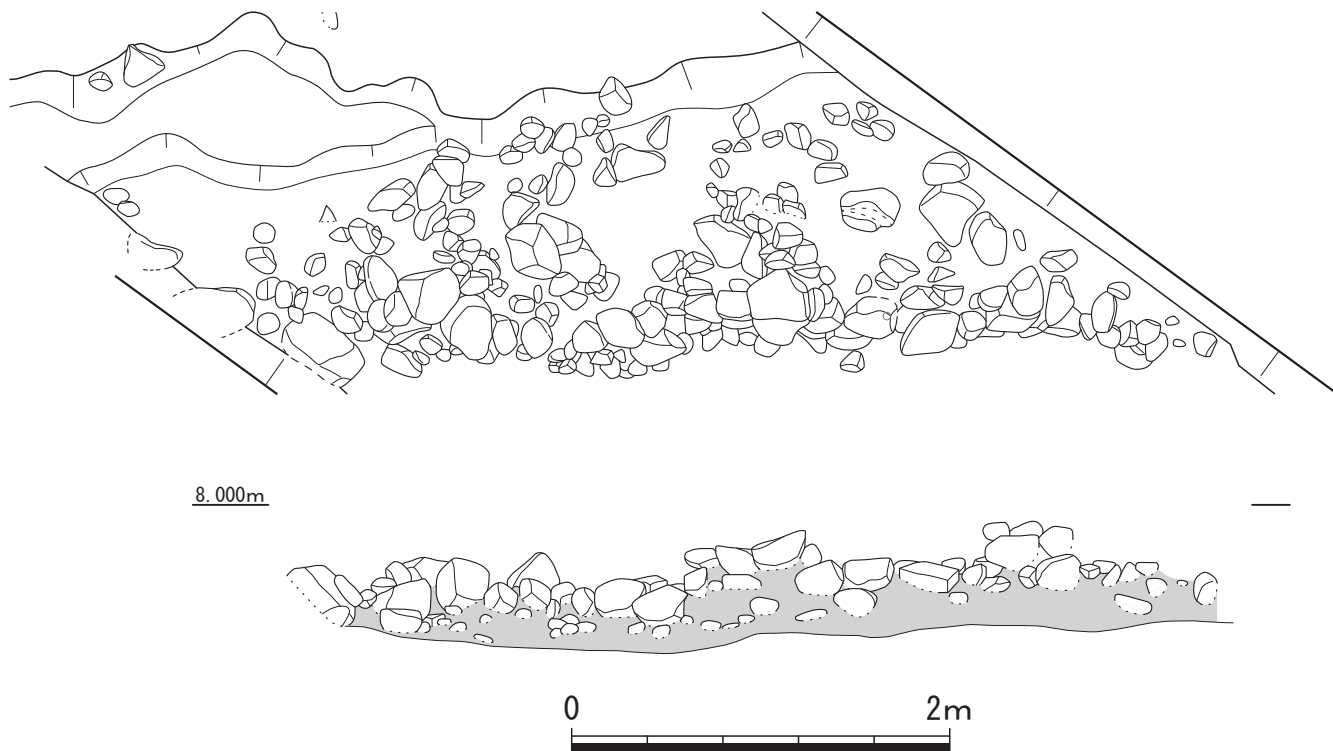
P-5 A3区から検出された。長軸が30cm・短軸20cmの平面形を呈し、深度は25cm以下であった。覆土は9層の堆積土が確認される。遺物は確認されなかった。

P-6 A3区から検出された。長軸が30cm・短軸20cmの平面形を呈し、深度は10cmを図る。覆土は9層の堆積土で構成される。深度が浅かったが、これは10層の礫層で検出したため、往時は生活面が検出面よりも高かったと考える。



※ピット内における覆土はすべて9層で構成される

第9図 ピット平面図および断面図 (S=1/40)



第10図 石組遺構平面図および断面図 (S=1/40)

石組遺構（第 10 図）

A6 区から A8 区にかけて検出された遺構で、試掘調査の TP.6 で礫の集中域と報告されている。遺構の観察から石組の残存状況は良好ではなく、壊されたように思える。北側は裏込めに使用されたとされる礫が認められる。裏込め内の A8 区から A5 区にかけての堆積土は 9 層の遺物包含層にあたり、土師皿を中心とした遺物が出土している。滑石製石鍋も出土しており、縦耳型石鍋の破片も確認されている。また青磁片も確認されている。遺物は 13 世紀から 14 世紀にかけての年代を与えることができ、この結果をもとに 8 層を含めた石組遺構の意味を考えると、石組遺構を構築するために土砂を運んできて埋めた可能性が高い。8 層内の遺物は全体的に摩滅が目立つが、これは水の影響でローリングを受けたと考えられる。石鍋片も滑石特有のなめらかな触感もなく、表面が白化した状態で出土している。石組遺構を造るために埋土として持ち込まれたと考える。

第 4 節 遺物

そのほとんどが 9 層からの出土であった。中世の遺物包含層で特に大小の土師皿片が出土している。特に注目すべき点は滑石製石鍋の出土である。近くには弥生時代の墓域とした金比羅神社が位置するが、今回の調査では弥生時代の土器は数点のみの確認であった。しかも、ローリングを受けており、図化に耐えられない状況の資料であった。本章では中世の資料を紹介する。

1 は A7 区 9 層出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つ。底部の内側は指圧痕が確認される。外側は糸切り痕が確認されるも回転方向は摩滅のため不明である。石英の混入が目立つ。

2 は A7 区 9 層出土の土師皿片である。体部下半は内湾、体部上半は外反する。特に体部下半は横方向の沈線が確認されるが、これは回転台による成形時の痕跡と考える。胎土観察から回転台は右方向と思われる。底部には糸切り痕のほかに板状圧痕も認められる。

3 は P-1 内出土の土師皿である。覆土は 9 層と同様である。内・外面ともに器面は荒れ、摩滅が目立つ。体部上半は外反気味に成形され、口唇端部は丸みを帯びた形状となっている。底部の内面には指圧による調整が施される。糸切り痕も部分的であるが確認できる。内・外面にススの付着が認められることから、灯明皿として使用されたと考える。胎土は赤色粒子と石英の混入が確認される。

4 は 9 層出土の土師皿片である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部には糸と切り痕と板状圧痕が確認される。内面には成形時による横位の沈線傷が認められる。石英の混入が目立つ。

5 は A7 区 9 層出土の土師皿片である。体部下半の内湾が目立つ。内面は指圧痕が確認される。底部は糸切り痕が認められるが、摩滅のため回転方向は不明である。しかし、底部切り離し時における胎土の隆起から右方向と推察される。板状圧痕も確認される。

6 は 9 層出土の土師皿片である。体部下半は内湾、体部上半は外反する。底部は糸切り痕と板状圧痕が確認される。内面にはススの付着痕が認められるため、灯明皿として使用された可能性が高い。胎土には赤色粒子が混入している。体部下半には成形時における横位の線（稜線）状痕が認められる。

7 は 9 層出土の土師皿片である。内・外面ともに体部には指圧痕が確認される。摩滅が目立つため、回転方向は不明である。口縁部は欠損しているが、その形状から外反していることがわかる。

8 は 9 層出土の土師皿片である。底部には直径 1cm の石英の混入が確認される。体部下半を内湾させて、

その後、上半を指おさえによって外反されている。底部には糸切り痕が確認されるが、摩滅のため回転方向は不明である。内面の摩滅が目立つ。内面がローリングの影響を受けたと考える。

9 は 9 層出土の土師皿片である。体部下半から体部上半にかけて内湾しながら外反する形状を呈している。糸切り痕も確認でき、その観察から回転は左方向であることがわかった。内面には指圧調整が施される。外面は回転台による成形の際についた横位の線状痕が認められる。

10 は A8 区から A10 区にかけて 9 層から出土した土師皿片である。内・外面ともに摩滅が目立つ。ほぼ直線状の立ち上がりを呈するが、若干、内湾気味の感がある。底部は糸切り痕と板状圧痕が確認できる。胎土には赤色粒子の混入が認められる。糸切りの切り離し痕から回転台は右方向である。

11 は 9 層出土の土師皿片である。器面は一部剥離している箇所が認められるものの、状態は大変良好である。回転方向は糸切り痕の観察から左方向と思われる。内・外面ともに器面が黒くなっている箇所が確認され、これらはススの付着痕と考えられる。灯明皿として使用した可能性が高い。

12 は 9 層出土の土師皿片である。立ち上がりは体部下半が内湾、体部上半は外反している。体部下半は指おさえの痕跡が認められる。外面にススの付着が残る。

13 は 9 層出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つ。底部は板状圧痕が確認されるため、糸切り痕は僅かに認められる。体部下半は内湾しており、成形時における線状痕が稜線として残る。

14 は 9 層出土の土師皿片である。内面には工具痕が認められる。体部下半は内湾気味に成形されている。糸切り痕は確認されるが、摩滅のため回転方向は不明である。外面は成形時における線（稜線）状痕が残る。底部に打撃痕が認められるが、この衝撃で皿が割れた可能性が高い。

15 は 9 層出土の土師皿片である。摩滅は目立つものの、糸切り痕は確認できる。観察の結果、回転台は左方向であることがわかった。胎土は赤色粒子の混入が認められる。外面に敲打痕が確認される。

16 は 9 層出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つ。底部は板状圧痕が明瞭に残るため、底部から体部下半にかけて丸みを帯びた形状を呈している。赤色粒子が認められる。

17 は 9 層出土の土師皿片である。底部のみの残存である。全体的に器面は摩滅している。糸切り痕は確認できる。粒子の移動から回転は右方向と認められる。内面は指圧調整が確認できる。胎土には赤色粒子と石英の混入が目立つ。粒子は大きいのは直径 3mm を有するものがある。

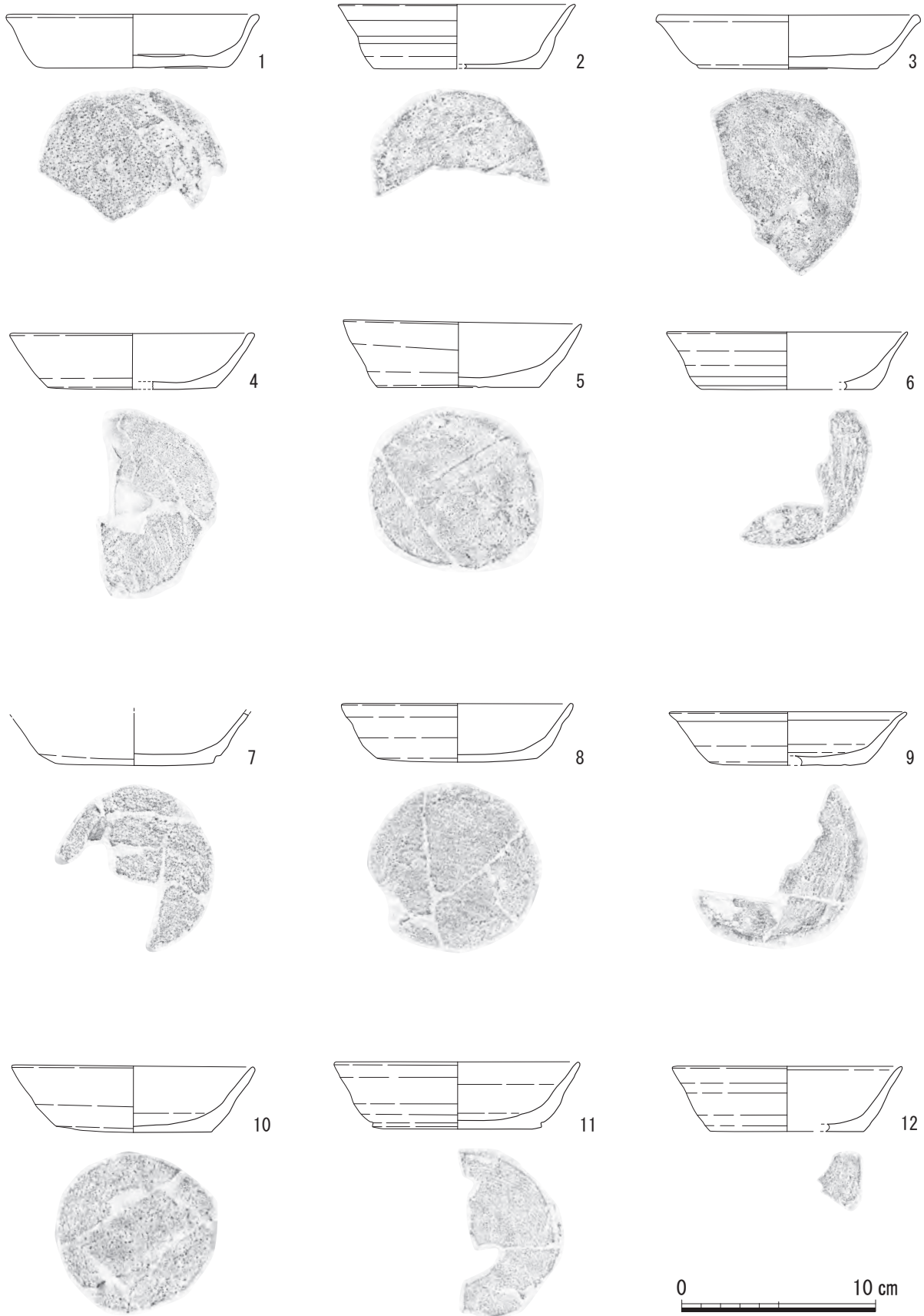
18 は 9 層出土の土師皿片である。内・外面ともに摩滅が目立つ。胎土には赤色粒子と石英の混入が確認される。糸切り痕も僅かであるが認められる。立ち上がりは内湾気味に成形される。

19 は 9 層出土の土師皿片である。体部下半から底部にかけて残存する。内・外面ともに摩滅が目立つが特に内面は器面が荒れた状態で、表面観察が困難な状況である。胎土には赤色粒子の混入が確認できる。また、石英も混入する。底部は糸切り痕と板状圧痕が確認される。粒子の移動痕から回転は右方向であることがわかる。体部下半と底部の境界付近には指おさえによる調整痕が認められる。

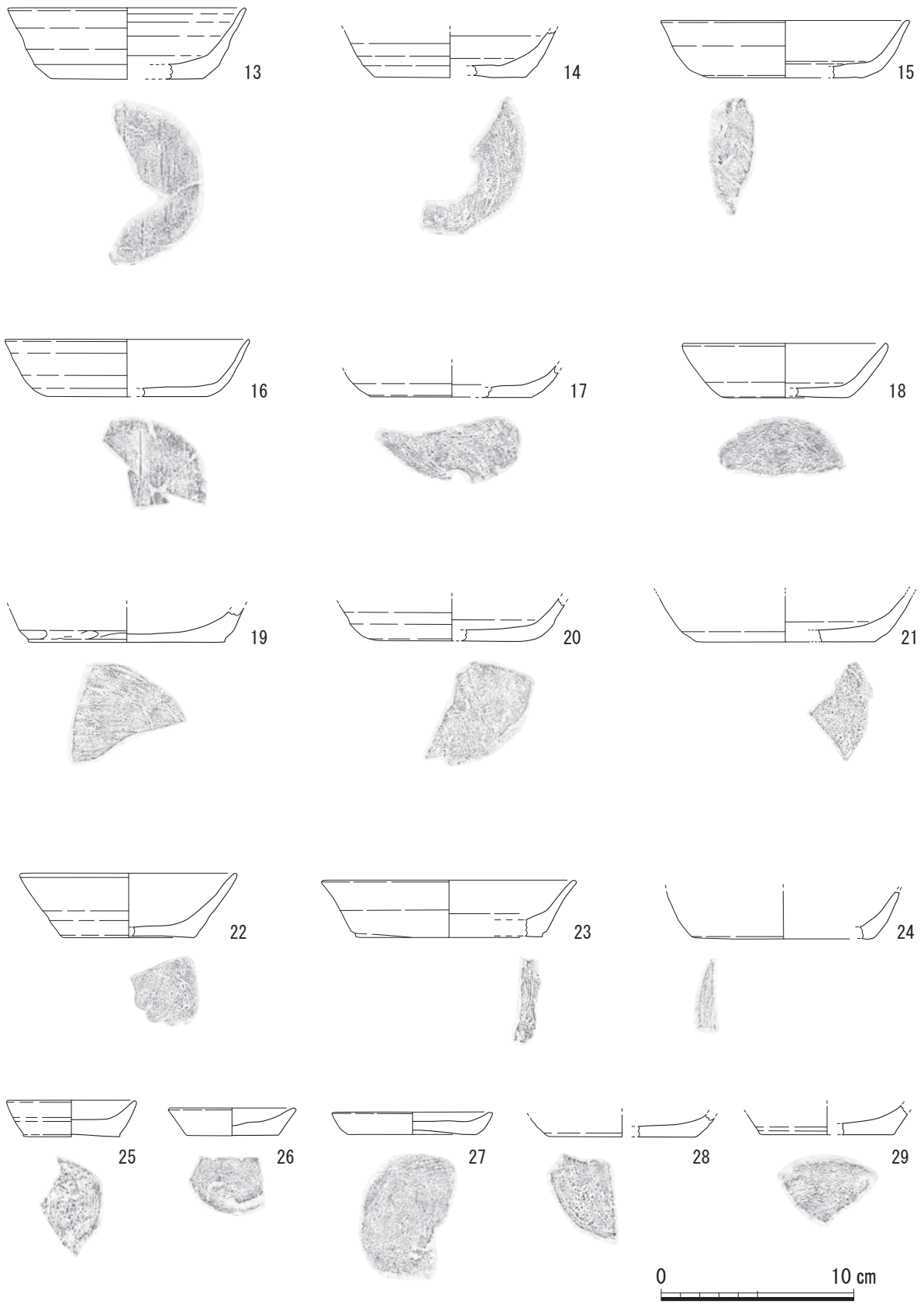
20 は 9 層出土の土師皿片である。内・外面ともに摩滅が目立つため詳細な観察は不明である。底部は明瞭な板状圧痕が確認されるため、糸切り痕は体部との境に僅かながら残る程度である。

21 は 9 層出土の土師皿片で、体部上半から口縁部が欠損している。全体的に摩滅が目立つ。体部下半には指圧痕が確認される。赤色粒子と石英の混入が目立つ。

22 は 9 層出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つため詳細な観察ができない。体部には指おさえによる調整痕が確認される。胎土には赤色粒子と石英の混入が認められる。

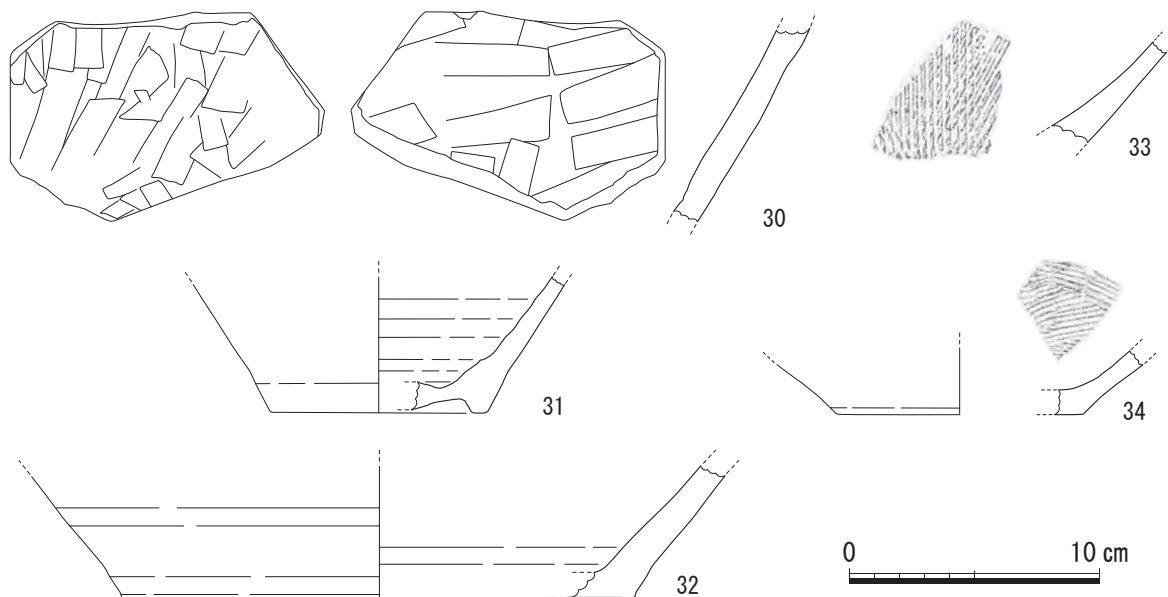


第 11 図 出土遺物① (S=1/3)



第 12 図 出土遺物② (S=1/3)

- 23 は9層出土の土師皿片である。底部と体部の境に直径5mm前後の礫が混入している。全体的に赤色粒子の混入が目立つ。底部には糸切り痕が確認されるものの、回転方向は摩滅のため不明である。
- 24 は9層出土の土師皿片である。体部下半の残存であるため詳細な観察はできない。外面にススの付着がみられる。灯明皿として使用したと思われる。内・外面ともに器面が荒れている。
- 25 は9層出土の小型の土師皿片である。摩滅は目立つものの、糸切り痕は観察でき、回転は左方向であると判明した。体部には直径5mm以下の礫の混入が確認される。また、赤色粒子の混入も認められる。内面には指圧による調整痕が残る。
- 26 はA10区7層出土の土師皿片である。3分の1の残存である。石組遺構の外側（南側）から出土した。摩滅はしているが、糸切り痕や左方向の回転が確認できる。内・外面ともに指圧痕が確認される。
- 27 は9層出土の土師皿片である。器高が約1cmの浅い皿で赤色粒子の混入が目立つ。全体的に摩滅が目立つため、回転方向は不明である。糸切り痕は確認される。底部に歪みがみられる。
- 28 は9層出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つ。底部片であるため糸切り痕の確認だけにとどまる。体部下半が僅かに残るが、指おさえによる調整痕が認められる。
- 29 は9層出土の土師皿片で底部のみ残存。全体的に摩滅が目立つ。底部には糸切り痕が確認される。
- 30 はTP.6内の3層出土の瓦質土器である。器種は甕。試掘調査のⅢ層に該当する。当初、須恵器の甕片として観察を行ったが、木村藍子氏（株式会社島田組）の助言を受けて瓦質土器とした（文責は東にある）。外面は指おさえ+工具によるナデ調整が施される。内面は指おさえの痕跡が認められるが、器面の剥がれのため詳細は不明である。
- 31 は9層出土の須恵器の壺である。内・外面ともに降灰が認められる。高台には焼成時における重ね焼きの砂の付着が確認できる。高台は削り出しによるものである。底部に高台の粘土を継ぎ足して、それから高台の成形を行っている。
- 32 は石組遺構内出土の甕片で裏込めの中から確認された。底部が僅かに残る。内・外面ともに焼成は良好である。外底には焼成時における離れ砂の痕跡が確認される。内面には砂が付着している。



第13図 出土遺物③ (S=1/3)

33 は A8 区 7 層の出土の播鉢片である。交差する摺目を形成後に施釉を行っている。40 は底部に近いことから内・外面に焼成時における砂の付着が認められる。焼成は良好である。

34 は 9 層出土の瓦質土器である。器種は播鉢。底部付近の残存であるが、破片のため詳細な観察はできない。多方向のスリ目が認められる。防長系の播鉢も考えられる。

35 は 9 層出土の石鍋片である。材質は滑石。口縁部の残存である。口縁部の残存状況から縦耳型石鍋の一部であることがわかる。口縁部から口唇端部にかけてノミ痕が認められる。

36 は 9 層出土の石鍋片である。材質は滑石。胴部片である。破片資料であるため全体観察は難しい。外面にノミ痕が確認される。器種の特定はできない。破断面の観察から片岩状の割れが認められる。口縁径よりも底径の方が小さくなるタイプと推定される。

37 は 7 層出土の滑石製石鍋片である。外面にはノミ痕が確認される。内面は擦過状の使用痕が残る。破断面の観察から片岩状の割れ方が認められる。

38 は 9 層出土の滑石製石鍋片である。外面にノミ痕が確認される。内面は擦過状の使用痕が残る。破断面の観察から石の目が斜方向であることがわかる。その影響で内面にはクラックが認められる。断面が 2cm と厚手を呈することから 38 は大型の石鍋であることがわかる。このことから時期は縦耳型石鍋から鐳付型石鍋の初期段階に該当することがわかる。

39 は石鍋である。材質は滑石。底部片である。外面にはノミ痕が認められる。底部の内面は石鍋の内部加工時のノミ痕がわずかに残る。1cm 程度の厚みを有する。小破片のため器種の特定はできない。

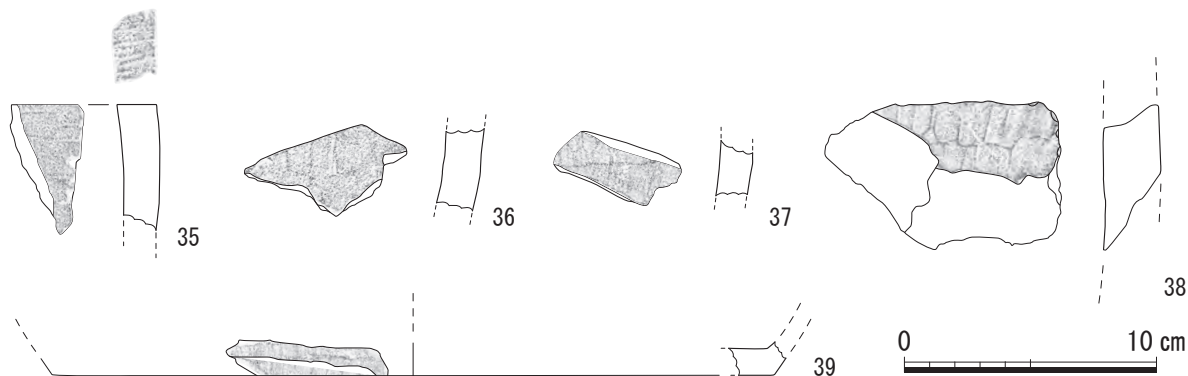
40 は 9 層出土の青磁碗の破片である。口縁部がやや外反する。内・外面ともに貫入が認められる。口縁部内面に 2 条の沈線が確認される。沈線は下位のものがわずかに曲線を呈している。

41 は 9 層出土の青磁碗片である。口縁部はやや外反気味となる。施釉面は貫入が認められる。口縁部内面は 1 条の沈線が確認される。口唇端部は先細りした状態に仕上げている。

42 は 9 層出土の青磁片。器種は碗である。内・外面ともに貫入が認められる。体部下半は内湾させ、体部上半は外反させている。口唇端部は外反気味にやや先細りさせた端部処理を行っている。

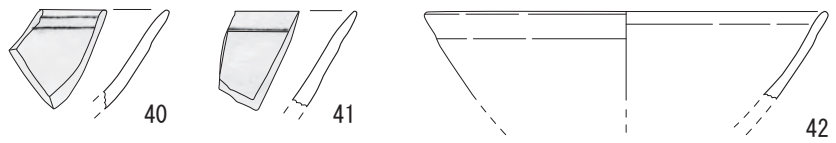
43 は 9 層出土の青磁碗の底部片である。高台は削り出しによる処理が行われ、外側は工具による面取りの痕跡がみられる。回転は左方向である。内面は見込みに圏線がみられ、渦巻き状の文様が施される。草花文の可能性が高い。外面は僅かに残る痕跡から鑄蓮弁文が施されている。

44 は 9 層出土の香炉である。口縁部から頸部にかけての残存である。口唇端部には施釉は施されない。口唇端部に炭化物の付着がみられる。体部には施文がみられるも詳細は不明である。

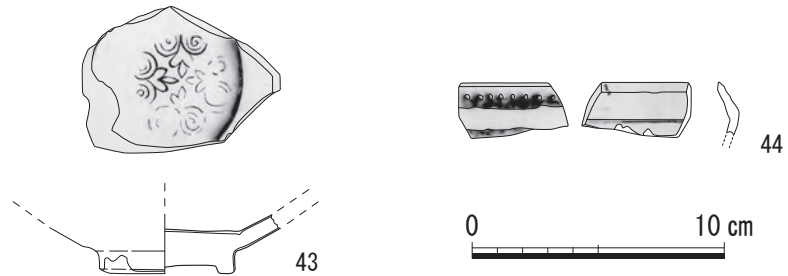


第 14 図 出土遺物④ (S=1/3)

45 は A8 区から A10 区にかけて出土した。外面は二重網目文が確認される。内面は直線状の組み合わせ文様が施される。試掘調査のⅢ層に該当する。18 世紀中葉以降と思われる。



46 は 5 層出土の二重網目文の磁器片である。文様から碗と考えられる。内面にも文様がある。



第 15 図 出土遺物⑤ (S=1/3)

47 は 7 層出土の磁器碗片

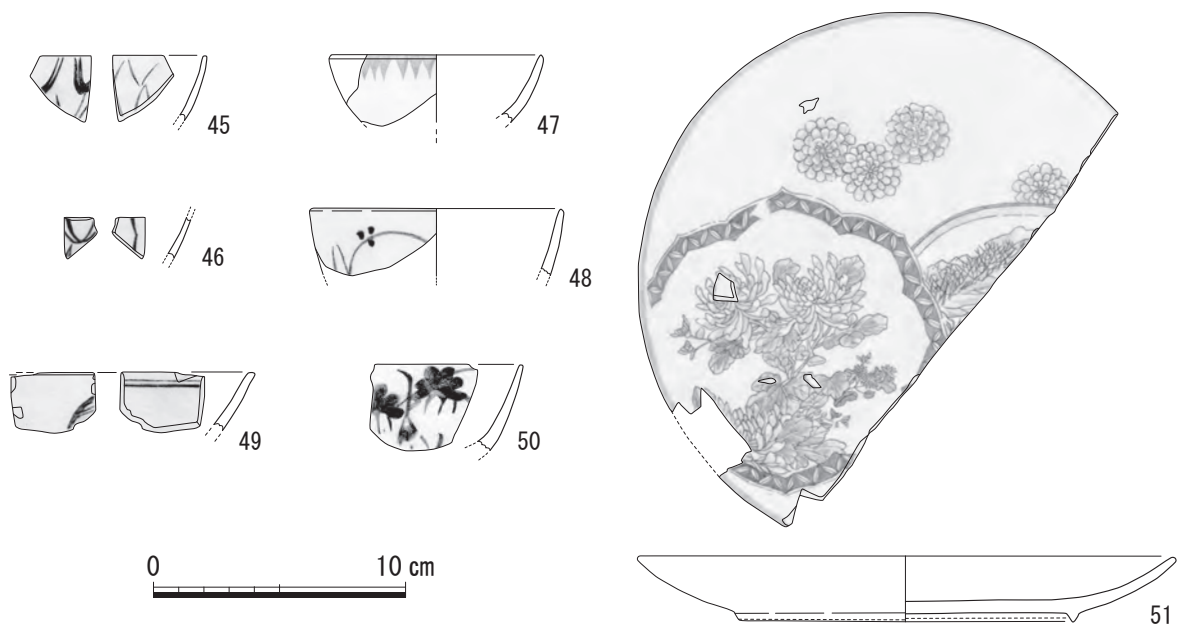
である。口唇端部から口縁部にかけて砂の付着が認められる。口縁部には逆三角形の連続文がみられる。雨降文で 18 世紀中葉以降のものと思われる。試掘調査のⅢ層に該当する。

48 は 9 層出土の磁器碗片である。文様は草花文と思われる。内面に文様はみられない。石組遺構の裏込め石の中から出土している。このエリアは石組遺構外の 7 層と隣接しているため、何らかの原因で石組遺構内に流入してきたと考える。18 世紀中葉以降と思われる。試掘調査のⅢ層に該当する。

49 は A8 区 7 層出土の磁器碗片である。小片のため染付が僅かに残るものの、文様は丸文であることがわかる。圏線の中に数本の線と点線が入り、併せて青丸も丸文の近くに施文される。18 世紀中葉以降のものと思われる。試掘調査のⅢ層に該当する。

50 は 7 層出土の磁器碗片である。外面のみ文様。施文が明瞭ではないため詳細な特定まではできない。梅文もしくは竹文の可能性が高い。18 世紀中葉以降と思われる。試掘調査のⅢ層に該当する。

51 は 3 層出土の皿片である。内面のみの文様である。口唇端部に縁錆が施される。見込み部は銅板転写による文様が施されている。底部には印がみられるが欠損のため詳細は不明。近代以降と考える。



第 16 図 出土遺物⑥ (S=1/3)

遺物番号	グリッド層位	種別	器種	法量		色調		胎土	焼成	備考
				口径	器高 底径	内面	外面			
1	下層確認トレンチ包含層	土師質土器	皿	(13.2)	2.8	9.8	にぶい橙色	石英 角閃石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 体部外反する 12C前～中
2	遺物包含層	土師質土器	皿	(13.3)	3.0	(9.8)	橙色	石英 長石 赤色粒子	良	皿A 体部外反する 見込部は段を持つ 13C初～中 体的に摩滅
3	P1	土師質土器	燈明皿	(13.8)	2.8	(9.4)	にぶい橙色	石英 赤色粒子	良	皿A 体部外反する 口縁端部が丸く膨らむ 煤付着 13C初～中
4	遺物包含層	土師質土器	皿	(13.3)	3.0	(9.8)	橙色	石英 長石 赤色粒子	良	皿A 体部外反する 見込部は段を持つ 13C初～中
5	遺物包含層 A7	土師質土器	皿	12.4	3.4	8.5	浅黄橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 体部外反して立ち上がる 13C初～中
6	遺物包含層	土師質土器	坏	(12.6)	3.0	(8.8)	橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 体部外反する 内面一部に黒斑有 13C中～後
7	遺物包含層	土師質土器	皿	-	2.7+ α	8.1	明赤褐色	石英 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 体部外反して立ち上がる 見込部は平ら 13C初～中
8	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.1)	3.1	(8.4)	橙色	石英 赤色粒子	良	皿A 体部内湾しており 見込み部は平ら 13C中～後
9	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.4)	2.8	(8.0)	橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 体部外反し見込み部は平 13C初～中
10	III層 A8～A10	土師質土器	皿	12.7	3.45	8.1	橙色	石英 白色粒子	良	皿A 体部内湾する 見込部は低い位置に稜を持つ形状 13C中～後
11	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.8)	3.5	(8.8)	浅黄褐色 黒色	角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	良	皿A 体部外反して立ち上がる 13C中～後
12	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.0)	3.4	(8.0)	橙色 にぶい橙色 一部黒色	石英 角閃石 長石	良	皿A 体部外反している 外面部分的に黒斑有 13C中～後
13	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.4)	3.8	(8.0)	にぶい橙色 色	石英 角閃石 赤色粒子	良	皿A 体部外反して立ち上がる 段が顕著 14C初～中
14	遺物包含層	土師質土器	皿	-	2.4+ α	(7.9)	にぶい黄橙 色	石英 長石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 見込部は外周が凹み中央が膨らむ 12C後
15	下層確認トレンチ包含層	土師質土器	皿	(13.0)	3.0	(8.8)	橙色	長石 角閃石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 体部やや外反して立ち上がる 13C中～後
16	下層確認トレンチ 遺物包含層	土師質土器	坏	(12.8)	3.0	(8.4)	橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 体部は立ち上がり丸みを帯びている 見込部は平ら 13C中～後
17	遺物包含層	土師質土器	皿	-	1.65	(8.4)	橙色	石英 赤色粒子	良	皿A 全体的に摩滅 体部ナデによる段を持つ形状 底部に種子圧痕か 13C初～中
18	下層確認トレンチ包含層	土師質土器	皿	(10.8)	3.35	(6.7)	橙色	石英 長石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 体部は段を持たない 見込み部は平ら 13C中
19	遺物包含層	土師質土器	皿	-	1.8+ α	(10.3)	浅黄褐色	石英 角閃石 長石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 底部からの立ち上がり部分にヨコ方向の工具による成形 痕有 12C前～中
20	遺物包含層	土師質土器	皿	-	2.2+ α	(8.8)	橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 12C前～中
21	遺物包含層	土師質土器	皿	-	2.4+ α	(9.4)	橙色	石英 角閃石 赤色粒子	良	皿A 体部内湾する形状と考えられる 13C中～後
22	遺物包含層	土師質土器	皿	(11.3)	3.4	(6.8)	橙色	石英 角閃石 赤色粒子	良	皿A 体部はナデにより段を持つ 見込部は平ら 14C初～中
23	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.8)	2.9	(8.8)	浅黄褐色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 口縁端部が丸く膨らむ 体部はやややない碗する 12C後
24	遺物包含層	土師質土器	皿	(12.2)	(2.5)	(9.6)	浅黄褐色 黒色	石英 角閃石 長石 赤色粒子 白色粒子	良	皿A 体部内湾する 外面底部黒斑有り 13C中～後
25	遺物包含層	土師質土器	皿	(6.8)	1.9	(5.0)	橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 体部は段を持たない 14C初～中

第1表 出土遺物観察表①

遺物番号	グリッド層位	種別	器種	法量		色調		胎土	焼成	備考
				口径	器高	底径	内面			
26	A10 暗青灰色粘質土 レキ層	土師質土器	皿	(6.7)	1.45	(4.9)	にぶい黄褐色	石英 角閃石 白色粒子	良	皿A 体部に段をもたず見込みの中央部に凹み有 12C 後
27	遺物包含層	土師質土器	皿	(8.4)	1.2	(6.7)	橙色	石英 角閃石 赤色粒子	良	皿A 体部に段を持たない 小皿 13C 中
28	遺物包含層	土師質土器	皿	-	1.2+ α	(7.6)	にぶい黄褐色 一部橙色	石英 角閃石 長石 赤色粒子	良	皿A 時期不明
29	遺物包含層	土師質土器	皿	-	1.5+ α	(7.0)	橙色	石英 長石 赤色粒子	良	皿A 14C 初～中
30	TP-6 III層	瓦質土器	甕	-	8.1+ α	-	灰色	白色粒子 小石含む	不	須恵器の可能性を考えたがタダキ等の須恵器に見られる調整の痕跡が認められなかった為瓦質土器と判断した
31	遺物包含層	須恵土器	壺	-	5.5+ α	(8.8)	灰色	白色粒子	良	高台部重ね焼き時の砂付着 底部に歪み有 高台は削り出しの痕跡がある為粘土貼り足し後削り出しと考えられる
32	石組遺構内(グリッド)	備前	甕	-	5.5+ α	(20.6)	赤灰色	赤色粒子 白色粒子	良	
33	A8 暗青灰色粘質土	陶器	播鉢	-	4.1+ α	-	黒褐色	白色粒子	良	
34	遺物包含層	瓦質土器	播鉢	-	2.7+ α	(10.0)	灰色	角閃石 白色粒子	良	防長系か
35	遺物包含層	石製品	石鍋	-	5.0+ α	-	灰白色	-	-	石材：滑石 水中に埋没していたことにより表面が白化
36	遺物包含層	石製品	石鍋	-	3.3+ α	-	灰白色	-	-	石材：滑石 水中に埋没していたことにより表面が白化 方形の磁型の耳を持つ石鍋の体部と考えられる 11C
37	暗青灰色粘質土	石製品	石鍋	-	2.2+ α	-	灰白色	-	-	石材：滑石 水中に埋没していたことにより表面が白化 縦耳の石鍋と考えられる
38	遺物包含層	石製品	石鍋	-	6.0+ α	-	灰白色	-	-	石材：滑石 水中に埋没していたことにより表面が白化 底部片 11C～13C
39	遺物包含層	石製品	石鍋	-	1.3+ α	(28.9)	灰白色	-	-	石材：滑石 水中に埋没していたことにより表面が白化 方形の耳を持つ石鍋の体部と考えられる
40	遺物包含層	青磁	碗	-	4.0+ α	-	灰オリーブ色	精緻	良	貫入有
41	遺物包含層	青磁	碗	-	3.9+ α	-	灰オリーブ色	精緻	良	貫入有
42	下層確認トレンチ 包含層	青磁	碗	(16.2)	3.5+ α	-	にぶい黄色	白色粒子	良	貫入有
43	包含層	青磁	碗	-	2.4+ α	5.4	灰オリーブ色	黒色粒子	良	見込み部文様は草花文と考えられる 團縁はくつきりと深く掘られているが 見込み部の文様は浅く掘られており不明瞭 外面は輪蓮弁
44	遺物包含層	青磁	香炉	-	2.1+ α	-	明緑灰色	精緻	良	唇端部側に変化物か
45	A8～A10	磁器	碗	-	2.6+ α	-	透明釉 灰白色(胎土)	精緻	良	文様：二重網目文
46	暗青灰色砂質土	磁器	碗	-	1.6+ α	-	透明釉	精緻	良	文様：二重網目文
47	下層確認トレンチ 青灰色	磁器	碗	(8.6)	2.7+ α	-	透明釉	精緻	良	文様：雨降文
48	遺物包含層	磁器	碗	(10.2)	2.7+ α	-	透明釉	精緻	良	草花文
49	A8 III層	磁器	碗	-	2.3+ α	-	透明釉	黒色粒子	良	文様：丸文
50	下層確認トレンチ	磁器	碗	-	3.5+ α	-	透明釉	精緻	良	文様：竹文か
51	下層確認トレンチ III層	磁器	皿	21.5	2.6	13.5	透明釉 茶褐色(縁飾)	精緻	良	口縁部縁飾 見込部銅板転写 近代

第2表 出土遺物観察表②

第IV章 まとめ

短期間の調査にもかかわらず、大きな成果をあげることができた。当初、学史的な観点から弥生時代の遺構や遺跡が確認されると考えた。しかし、調査の結果、中世の遺物が多く確認されたことは大きな成果である。今回の調査で判明した成果を報告し、調査のまとめとしたい。

第1節 遺物について

土師皿

土師皿は器高が3cm前後と1cm前後のものに分けることができる。常光寺前駅西側遺跡出土の土師皿と同じ構成といえよう。胎土も赤色粒子や石英が混入するものが大半を占めていることも両遺跡出土の土師皿の特徴といえる。今回、図化に耐えうる資料を掲載したが、それ以外にも同じ特徴をもつ土師皿片も多数確認することができた。また、一部にはススの付着痕から灯明皿として使用されたことも考えられる。このことは土師皿が大量生産であったため、様々な用途で使用された一例である。また、実用性をもった食器具として使用されたこともうかがえる。

滑石製石鍋

今回、滑石製石鍋は縦耳型石鍋の破片 35 が確認されており、森田編年のA類、木戸編年のII類に相当する。両氏は細分化された型式が存在するが、当遺跡出土の石鍋片（旧番号31）で細分化は困難である。しかし、縦耳型石鍋の形状から11世紀から12世紀における資料であるといえる。また、38は断面幅が2cmであることから大型の石鍋である。直径が20cm以上のものであると推定される。このようなタイプは鏝付型石鍋の初期型式まで続くことがわかっており、森田編年でB類、木戸編年でIII-a類に相当する。もし、鏝付型石鍋であるならば、12世紀から13世紀にかけての資料といえよう。したがって、時期幅は広くなるものの、出土石鍋は11世紀から13世紀の時期であると考えられる。

第2節 石組遺構について

試掘調査（TP.6）の段階では礫の集中地点として報告されており、中から土師皿の出土も併せて報告している。土師皿については底部を上向きにして出土していたため、当初は祭祀的意味合いをもつ遺構とした結論を出していた。本調査の結果、石組遺構であることが判明し、試掘で出土した土師皿は投棄遺物と判明した。石組遺構の北側は遺物包含層（9層）としているものの、埋め土（2次堆積）であることも判明した。包含層中から土師皿片や石鍋片等が認められ、その型式から埋めた年代が14世紀以降と推定される。また、P-1内から土師皿が出土しており、覆土も包含層と同質であることから同じ14世紀以降に埋められたといえよう（ほかのピットも同じ覆土を有する）。

石組は崩壊していたものの、北西から南東にかけて造成されたことも分かった。野面積みのような形態をとっており、その中はグリ石を詰めた痕跡がみられた。石組手前（北側）から南側へ下っていく地形に対し土止め成形目的の石組と思われる。



第17図 13世紀における日野江城跡および周辺図（推定、S=1/20000）

第3節 近世以降の埋め立てについて

① 石組遺構の段階

先述したが、石組構築時の段階に裏込めの石と併せて9層を使用している。この層中に土師皿片や石鍋片・青磁片が混入していた。これらは11世紀から13世紀の時期に使用されたことから、石組遺

構の構築に関して、9層は14世紀以降に埋め土として使用された可能性が高い。しかし、他所から持ち運ばれた土であるため、本来の場所についての言及はできない。

② 近世における段階

近世の磁器に関しては18世紀中葉以降の時期に当てはめることができる。石組遺構は壊された状態で検出されたことから、埋め立ては石組遺構を破壊しながら行われたと考える。石組遺構の内外に中・近世の遺物の混入層（7層）が確認されており、そのことが石組遺構の破壊根拠としてあげられる。18世紀中葉以降の磁器の出土から、新田開発の目的で埋め立てが行われたと推定される。

③ 近代における段階

近代における埋め立ては明治時代になってからで、51のように銅板転写の皿の出土がその根拠となっている。1875（明治8）年に現在の国道251の道路建設時に金比羅神社が採土地として利用されたことから、道路周辺域も埋め立てが実施されたと考える。近代以降は現在の国道251を中心としながら東側への埋め立てたと推察される。

第4節 北岡金比羅祀遺跡の評価

今回の調査によって、中世から近・現代にかけて土地の造成が行われたことが判明した。12世紀から13世紀にかけての滑石製石鍋片と鎬蓮弁文を有する青磁片が出土しており、この地に持ち込まれたことを意味している。すなわち、貿易によって輸入されたものが滑石製石鍋・青磁であり、建保年間（1213年－1219年）における日野江城築城の時期にも合致する。埋め立ての古い段階が14世紀以降に位置づけられることから、埋め土出土の遺物は13世紀以前に食器具として使用されたと推定される。出土遺物は埋め立てによって持ち込まれているため、本来、使用された場所は第17図で示した城下町（推定）の可能性が高くなる。

A1区からA7区の調査では10層の礫層が確認されており、それを掘り込んだ柱穴から土師皿が出土した。検出された礫層と金比羅神社の標高に差がないことから、12～13世紀にかけて、推定城下町から金比羅神社にかけて細長い入江が存在したことが推定される。

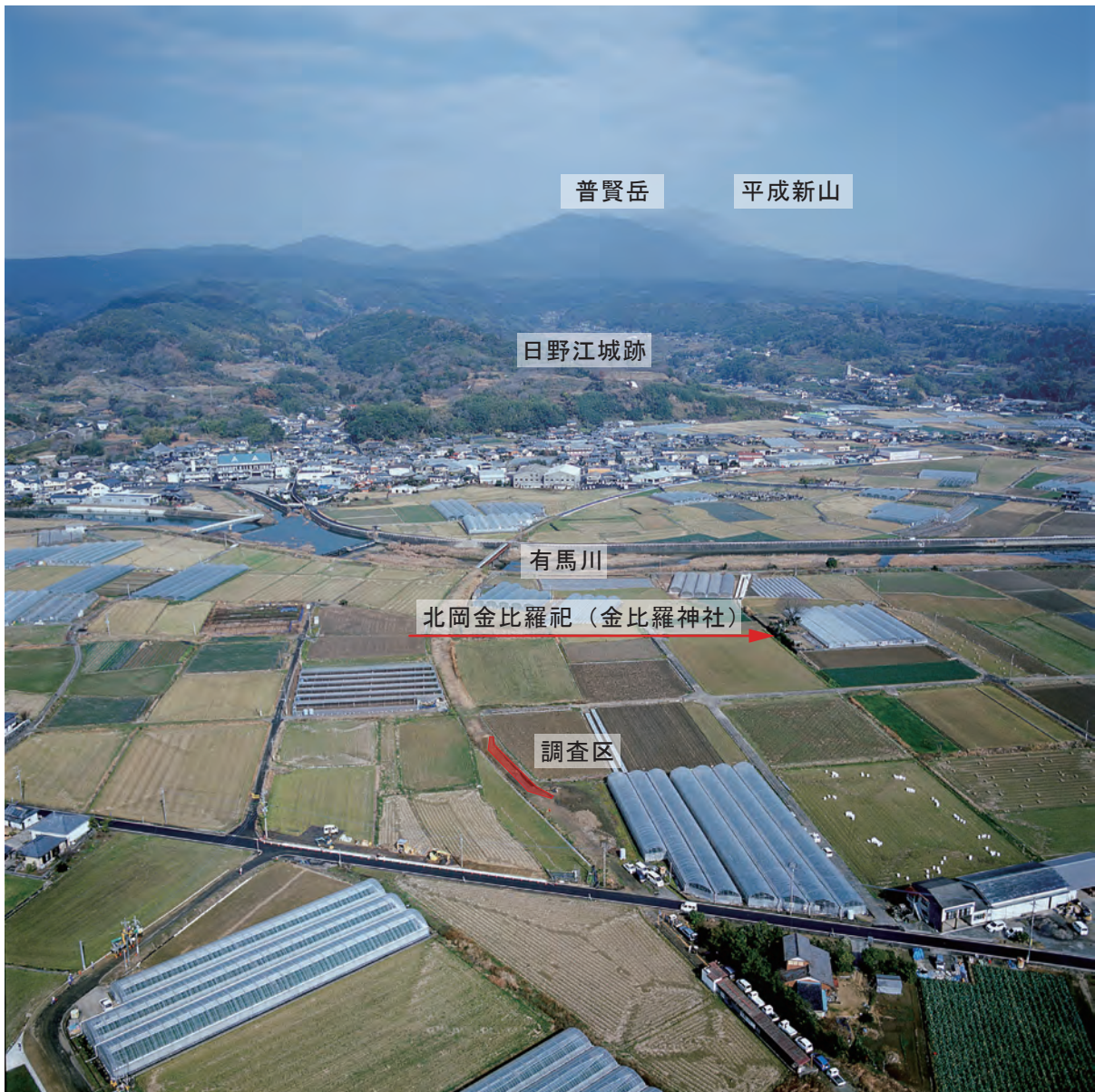
中世の遺跡として「今福遺跡」「常光寺前駅西側遺跡」「北岡金比羅祀遺跡」が存在する。これらの遺跡は入江を囲む状態で位置しているが、この状況を木村岳士氏は「有馬遺跡群」としており、日野江城の築城期に関わる遺跡として、遺物や遺跡間の関係を指摘している。今後、築城期の日野江城と周辺遺跡との関わりを調べる上で重要な作業となってくる。

今回の北岡金比羅祀遺跡の出土遺物は築城期における日野江城を考察する上でも貴重な資料とすることができよう。常光寺前駅西側遺跡からも同時期の遺物が確認され、日野江城との一体性を考察する上で補完資料としての位置づけができる。日野江城を含む周辺一帯の調査事例が待たれ、また、推定した城下町も今後の調査によって、より詳細な解明をしなければならない。築城期における日野江城の痕跡を調査することで、城郭の機能が時系列でどのように変遷したかを解明する必要がある。今後の調査を待ちたい。

【参考文献】

- 下川達彌 1974「滑石製石鍋考」『長崎県立美術博物館研究紀要』2
- 森田 勉 1983「滑石製容器」『佛教藝術』148 毎日新聞社
- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

圖 版



航空写真①



航空写真②



航空写真③

図版 2



航空写真④



航空写真⑤



TP.6 遺構検出状況



TP.6 遺物出土状況



本調査表土剥ぎ



下層確認トレンチ掘削状況①



下層確認トレンチ掘削状況②



遺構および遺物包含層掘削状況



P-1 土師皿出土状況



P-2 半截状況

範囲確認調査および本調査①

図版 4



P-3 半截状況



P-4 半截状況



P-5 半截状況



P-6 半截状況



石組遺構（南から撮影）

本調査②



遺物出土状況① (土師皿)



遺物出土状況② (土師皿)



遺物出土状況③ (石鍋)



遺物出土状況④ (石鍋)



遺物出土状況⑤ (須恵甕)



遺物出土状況⑥ (磁器)



埋め立て土層 (南壁土層、合成写真)

本調査③



東壁土層① (合成写真)



東壁土層② (合成写真)

本調査④



1



2



3



4



5

出土遺物①

図版 8

(第 11 ~ 12 図)



6



7



8



9



10



11



12



13

出土遺物②



14



15



16



17



18



19



20



21

出土遺物③

图版 10

(第 12 图)



22



23



24



25



26



27



28



29

出土遺物④



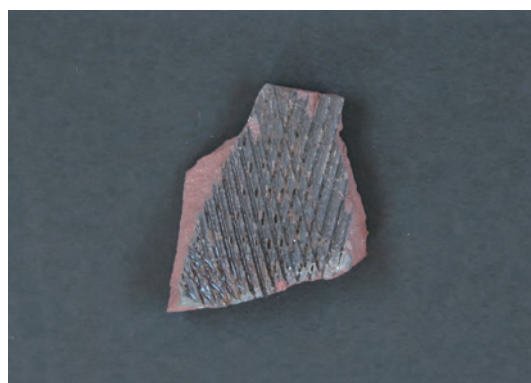
30



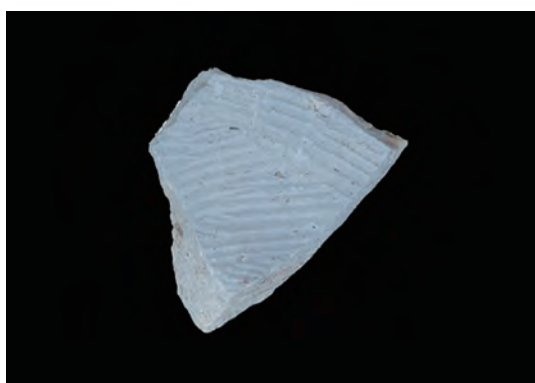
31



32



33



34



36



37



38

出土遺物⑤

図版 12

(第 14 ~ 15 図)



35



39



40



41



42

出土遺物⑥



43



44



45



46



47

出土遺物⑦

図版 14

(第 16 図)



48



49



50



51



調査に参加された皆さん

出土遺物⑧および集合写真

報告書抄録

ふりがな	きたおかこんびらしいせき
書名	北岡金比羅祀遺跡
副書名	市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	東 貴之
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 0957-73-6705
発行年月日	西暦2024年2月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたおかこんびらしいせき 北岡金比羅祀遺跡	みなみしまばらし 南島原市 みなみありまちょう 南有馬町	42214	025	32° 39' 00"	130° 14' 58"	20230104 ～ 20230120	135 m ²	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北岡金比羅祀遺跡	遺物包蔵地	中世	ピット 石組遺構	土師器 滑石製石鍋 陶磁器	

南島原市文化財調査報告書 第35集

北岡金比羅祀遺跡

2024. 2. 29

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 カキモト印刷